

# 過疎山間地域へ通う大学生・卒業生の主体性および 住民との協働における継続性に関する研究

－ 山梨県小菅村における「源流大学」実習プログラムから発展した活動に着目して －

INDEPENDENCE AND COOPERATION CONTINUITY WITH INHABITANTS OF FREQUENTLY  
COMING UNIVERSITY STUDENTS AND GRADUATES IN DEPOPULATED MOUNTAINOUS AREAS

－ Focusing on activities derived from "Genryu College" training programs in Kosuge Village, Yamanashi Prefecture －

藤井真麻<sup>\*1</sup>, 後藤春彦<sup>\*2</sup>, 森田 椋也<sup>\*3</sup>, 山崎 義人<sup>\*4</sup>

*Maasa FUJII, Haruhiko GOTO, Ryoya MORITA  
and Yoshito YAMAZAKI*

Effective methods to ensure the independence and the cooperation continuity with inhabitants of university students and graduates (USGs), which help enhancing sustainability of local communities, are to continue the cooperation among USGs by building the system for taking over activities with clear roles such as management of events, to make USGs and inhabitants cooperate independently by using Community-Reactivating Cooperator Squad (CRCS) members or former CRCS members as mediators, and to make USGs and inhabitants exchange personally through placing their activity bases close to each other.

**Keywords :** *External Supporter, University Student, Frequently Coming, Cooperation, Continuity, Kosuge Village*

外部支援者, 大学生, 通い, 協働, 継続性, 小菅村

## 1 章 序論

### 1-1 研究の背景

わが国において、高度経済成長期以降、都市への人口流出により、農村は深刻な人手不足や高齢化に直面し続けてきたが、近年、都市から農村へ移り住む人の流れが顕著にみられるようになってきた。特に、2014年に地方創生が政策として掲げられて以降、定住人口の増加を図ることに主眼をおいた取り組みが各地でみられる。しかし、日本の総人口が減少過程にある中で、地方自治体同士の人口獲得競争を招いている側面もある<sup>注1)</sup>。その上、競争の成果としての移住者が、地域の役割や行事等に関与しないケースも存在する<sup>注2)</sup>。

上述の背景から近年は、定住せずとも地域と関わる意欲を持つ人手（以下、外部支援者）を増やすことにより、地域の活動量向上を図る動きがみられている。なかでも、モラトリアム期間にある大学生を対象としたインターン等の交流プログラムは全国各地で行われている<sup>注3)</sup>。そのようなプログラムは、終了後も継続的な交流が期待されていることが多いが、プログラムに参加した大学生・卒業生の協働への主体的な姿勢を継続させることは容易でないことが指摘されている<sup>注4)</sup>。それゆえ、今後の活躍が期待できる大学生・卒業生の力を地域へ活かす機会の可能性を改めて検証し、大学生・卒業生の主体性と住民との協働の継続性を高める方法を検討する必要がある。

### 1-2 研究の目的

以上をふまえ本研究では、大学生とその卒業生の通いが継続してみられる山梨県小菅村を対象に、主体的に地域に通い続ける大学生・卒業生 (University Student and Graduate、以下 USG と記す) と、そうした大学生・卒業生と継続的に関わりを持つ住民に関して調査を行い、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素について明らかにすることを目的とする。

### 1-3 研究の位置づけ

都市農村交流事業や外部支援者の地域活動への参画過程については一定の研究蓄積がなされており、制度や地域活動の組織体制に着目したものや、外部支援者や住民等からみた交流事業や地域を捉えたものなど、幅広い知見が示されている。

協働に対する外部支援者の主体性や協働の継続性について着目した研究としては、都市住民による自主応援組織の形成過程について明らかにした藤木ら<sup>3)</sup>の研究や、地域づくりのマネジメントへの外部支援者の参画のあり方を考察した坂本ら<sup>4)</sup>の研究がある。これらの研究では、活動の実施主体を行政から住民や外部支援者へと移行することのメリットやそのマネジメント方法について述べているが、活動に参加する外部支援者の主体性の高まりの過程については言及されていない。

\*1 ㈱佐藤総合計画 修士 (建築学)

\*2 早稲田大学理工学術院 教授・工博

\*3 徳島大学人と地域共創センター 講師・博士 (工学)

\*4 東洋大学国際学部国際地域学科 教授・博士 (工学)

AXS Satow Inc., M.Arch.

Prof. Fac. of Sci. & Eng., Waseda Univ., Dr.Eng.

Assoc. Prof., Ctr. for Comm. Engagement & Lifelong Learning, Tokushima Univ., Ph.D.

Prof., Dept. of Regional Development Studies, Toyo Univ., Ph.D.

なかでも、大学生・卒業生の協働に対する主体性や協働の継続性について着目した研究としては、「地域づくりインターン」事業において、学生のインターン参加後の地域への再訪理由を明らかにした川見ら<sup>5)</sup>の研究や、交流継続における課題を明らかにした跡部ら<sup>6)</sup>の研究がある。川見らの研究では、大学生との継続的交流を見据えた交流プログラムの活動内容や体制づくりの必要性が示されているが、プログラム参加後の大学生の状況に応じた地域との関係継続の手法は明らかになっていない。また、跡部らの研究では、大学生と住民の両者の視点から交流活動を評価しているが、住民側の意見については、交流プログラム内での大学生の印象を明らかにすることに留まっており、大学生との継続的交流による影響を明らかにするまでには至っていない。

本研究では、大学生・卒業生の通いのモチベーションの向上プロセスやその背景にある地域側のコーディネートの変遷、および住民への影響を詳細に調査し、それらの関連性を一体的に整理することで、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素について明らかにする点に特徴を有する。

#### 1-4 研究の方法

研究の構成を図1に示す。また調査概要を表1に、本研究に関わる主体の呼称を表2に示す。2章において、資料調査<sup>7)</sup>および調査Iにより、対象地の概要と対象地における交流事業の変遷を把握・整理する。3章では、大学生・卒業生の通いによる地域としての状況変化を明らかにするため、交流プログラムとしての協働実態を資料調査<sup>7)</sup>と調査IIより把握し、次に学生有志団体と住民の協働実態を調査IIIより把握する。さらに、有志団体としての活動以外の大学生・卒業生と住民の協働の実態を調査IVのAより明らかにする。4章では、大学生・卒業生の地域に通うモチベーションの向上プロセスを明らかにするため、調査IVのB・Cより、大学生・卒業生の通いの目的の変遷と大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因を整理する。5章では、住民から見た大学生・卒業生の通いによる影響を明らかにするため、調査Vより住民から得た意見を整理する。6章では、3～5章で明らかになったことから、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素を明らかにする。その上で、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を担保するために、地域側が積極的に工夫できる点を考察し、結びとする。

#### 1-5 研究対象事例の位置づけ

大学生とその卒業生の通いが継続してみられる地域において調査を行うため、都市・農村間における学生の往来が長期にわたってみられ、その往来をコーディネートする団体を有する地域を対象とすることとした。都市・農村間における学生の往来のコーディネートを評価された団体は複数存在している<sup>注5)</sup>が、その多くが学生の派遣と受け入れのいずれか一方の役割を担うものである。研究対象とする山梨県小菅村は、学生の往来をコーディネートする事務局を地域内外の両方に持つことから、手厚いコーディネート環境を有する中で大学生・卒業生、地域、および住民の状況変化を追うことができる点に特異性を有する。一方、高齢化・過疎化が著しい山間地域という条件下で、域学連携や地域おこし協力隊の導入、道の駅の創設等により地域振興に力を入れてきた点については、全国の過疎地域と共通する一般性を有している。

表1 調査概要 Table1 Survey overview

<p><b>調査I：役場職員へのヒアリング調査（2章）</b> Surv. I：Interview (Chap.2) 調査日：2017.10.20</p> <p>対象：第3次総合計画の作成を担った役場職員1名 Object: Official who was responsible for creating the 3rd comprehensive plan</p> <p>内容：多摩源流まつりの開催から「源流にこだわった村づくり」を総合計画に定めるまでの経緯 Content: Process from holding the Tama Genryu Festival to adding "Making a village with focusing on the headwaters" to the comprehensive plan</p>
<p><b>調査II：大学事務局員へのヒアリング調査（3章）</b> Surv. II：Interview (Chap.3) 調査日：2017.08.09, 10.30</p> <p>対象：大学事務局員2名、地域内事務局員1名 Objects: 2 members of the resident secretariat and 1 member of the external secretariat</p> <p>内容：多摩川源流大学の設置経緯、運営体制等 Contents: History of Tamagawa Genryu College and its management system etc.</p>
<p><b>調査III：学生有志団体設立者へのヒアリング調査（3章）</b> Surv. III：Interview (Chap.3) 調査日：2017.09.13</p> <p>対象：「放課後の会」の設立者1名 Object: Founder of "After School Club"</p> <p>内容：「放課後の会」の設立経緯、設立動機 Contents: History of "After School Club" and why it was founded</p>
<p><b>調査IV：大学生・卒業生へのヒアリング調査（3・4章）</b> Surv. IV：Interview (Chap.3 &amp; 4) 調査日：2017.07.13-11.13</p> <p>対象：「放課後の会」に関わったことがあり、現在も地域と関わりがある大学4年生・卒業生を各代2名ずつ大学事務局員から紹介いただいた中で、調査協力を得られた9名 Objects: 9 survey participants among 2 each of 4th grade and above introduced by the secretariat of university, who have been involved in "After School Club" and who are still related to the village</p> <p>内容：A. 「地域や住民のためになれた」と少しでも思うこと、地域でのボランティアやアルバイトの経験（3章） B. 地域への通いの目的の変化（4章1節） C. 継続的に地域に通うようになった要因（4章2節） ①「また行きたい」「協力したい」という気持ちが高まった場面、②村民との関わりで嬉しかったことや印象に残っていること、③1人で地域に通うようになった理由やきっかけ Contents: [A] Episodes where he or she felt even a little that "I was able to benefit the village or inhabitants" and experiences of volunteer or part-time work in the village (Chap. 3) [B] Changes in his or her purpose of coming to the village (Sect. 1, Chap. 4) [C] Factors that led him or her to continue to come to the village (Sect. 2, Chap. 4) ① Scenes where the desire to go to the village again or to contribute to the village rose ② Episodes where he or she felt happy or impressive in relationships with the inhabitants ③ Why he or she became a frequent visitor to the village</p>
<p><b>調査V：住民へのヒアリング調査（5・6章）</b> Surv. V：Interview (Chap.5 &amp; 6) 調査日：2017.10.12-10.20</p> <p>対象：調査IV内で名前が挙げられた住民のうち、調査協力を得られた9名 Objects: 9 survey participants among the inhabitants who were mentioned in surv. IV</p> <p>内容：A. 大学生・卒業生との関わりを通じた変化やエピソード（5章） ①大学生・卒業生のおかげで助かったこと、嬉しかったこと、②大学生・卒業生と関わって変わったこと（個人の意識や行動）、③大学生・卒業生が村に入ったことによる身近な住民や村全体としての変化 B. 実習以外での大学生・卒業生との関わりの内容やきっかけ（6章） Contents: [A] Changes and episodes in relationships with USGs (Chap. 5) ① Episodes where USGs helped him or her and where they made him or her happy ② What has changed in relationships with USGs (individual consciousness and behavior) ③ Changes in his or her familiar inhabitants and the village as a result of USGs' starting to visit [B] How and why he or she involves himself or herself with USGs outside of training programs (Chap. 6)</p>
<p><b>調査VI：学生有志団体から発展した協働のコーディネーターへのヒアリング調査（6章）</b> Surv. VI：Interview (Chap.6) 調査日：2017.10.12-12.18</p> <p>対象：調査IV・Vにおいて名前が挙げられた学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーター2名 Objects: 2 coordinators for Cooperation developed from the activities of student volunteer group who were mentioned in surv. IV and V</p> <p>内容：住民及び大学生・卒業生に協働のきっかけを与えた動機、普段の仕事や立場について Contents: Why he or she inspired inhabitants and USGs to cooperate, usual job and position</p>

表2 本研究に関わる主体の呼称 Table2 Names of subjects involved in this study

主体の名称 character name	主体の説明 explain of character
住民 Inhabitant	地域の出身であり、調査時点で地域に居住している者 a person who was born in the village and lives there at the time of the survey
協力隊 CRCS member	地域おこし協力隊の任期中の者 a member of CRCS (community-reactivating cooperator squad)
元協力隊 Former CRCS member	協力隊の任期を終えた後も、地域に居住している者 a person who lives in the village after the term of CRCS
大学生 University Student (US)	調査時点で現役の大学生である者 a university student at the time of the survey
卒業生 University Graduate (UG)	調査時点で大学を卒業している者 a university graduate at the time of the survey
大学事務局員 Secretariat of university	地域内事務局員 Resident secretariat 学生を受け入れる地域側の大学事務局員(1名) a secretariat of university for taking in USs to the village
	地域外事務局員 External secretariat 学生を地域に送り込む大学側の大学事務局員(2名) a secretariat of university for sending out USs to the village

凡例 legends

□	地域の出身であり、地域内に居住している主体 born in the village and living there	■	地域外に居住している主体 living outside the village
□	地域の出身ではなく、地域内に居住している主体 not born in the village but living there		

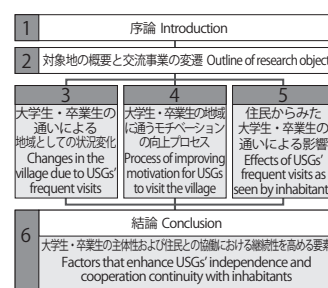


図1 研究の構成 Fig.1 Composition of this study 図2 小菅村の位置 Fig.2 Location of Kosuge Village

## 2章 対象地の概要と交流事業の変遷

### 2-1 対象地の概要

山梨県小菅村は、面積約 52.8 km<sup>2</sup>、人口約 740 人(2016 年 12

月時点)の村である。東京都民の飲料水の一部となる水源である多摩川の源流域に位置する(図2、図3)ため、総面積の95%を占める森林は、約3割が東京都の水源かん養林として管理されている。高齢化率は約45%と高く、高齢化・過疎化が進んでいる。また、小菅村の産業のうち、第1次産業の占める割合は1975年から2005年までの30年間で約50%から8%まで低下している。そのような状況を受けて、2007年より東京農業大学の人材教育プログラム「多摩川源流大学」が開始された。村民が講師となり学生や観光客に農林業を教えることで、農業の継続による源流域における文化・自然環境の保全と交流人口の増加<sup>注6)</sup>を図っている。

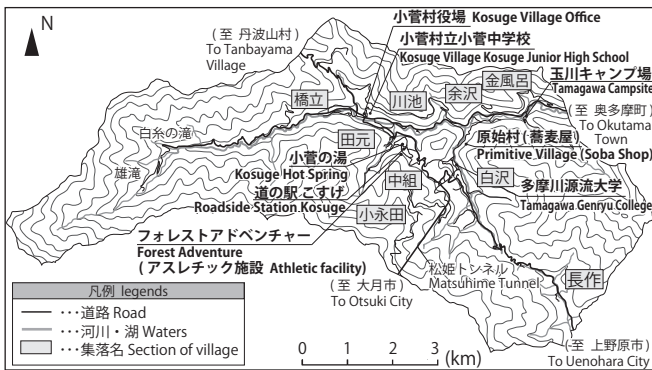


図3 小菅村の地図 Fig. 3 Map of Kosuge Village

2-2 対象地における交流事業の変遷(図4)

(1)「多摩川源流大学」開講に至るまでの交流事業の経緯

小菅村の交流事業は1987年の「多摩源流まつり」を契機として始まり、村の出身者に「戻ってきてもらう」ための交流事業が行われていた。当時の交流事業での気づき<sup>注8)</sup>をふまえ、2000年の第3次総合計画策定時より、東京都民に親しみのある多摩川の源流であるという村の特性を活かし、下流域の地域外住民との関係づくりを意識した「源流にこだわった村づくり」が開始された。その一環として、2001年に小菅村のシンクタンク「多摩川源流研究所<sup>注9)</sup>」

が設立され、下流域の関係団体や専門家等による村づくりについての情報収集が行われた。そのひとつとして行われた村民への全戸調査の結果を受けて、村内での学生の実習を通して村づくりを行うという「多摩川源流大学構想」が大学等の専門家から提起され、約2年の準備期間を経て<sup>注10)</sup>2007年より、村を実習地として大学生が農林業を学ぶ「多摩川源流大学(以下、源流大)」が開講された。

(2)「多摩川源流大学」開講後の活動組織の誕生と活動の広がり

源流大開講後、実習を受講した学生が村内で有志活動を開始し、2009年に学生有志団体「源流放課後の会(以下、放課後の会)」が設立された。これにより、村内の水田の復活や、小菅村野菜の販売・PRの場づくりなど、活動の広がりがみられるようになった。

また、地域産業や技術の伝承が困難な状況を打開するため、新たな産業を生み出す仕組みの受け皿として、2009年に「NPO法人多摩源流こすげ(以下、NPO)」が設立された<sup>注11)</sup>。現在は、大学事務局員とNPO職員が主体となって、源流大の運営を行っている<sup>注12)</sup>。

(3) 外部支援者の流入状況と地域おこし協力隊の役割

NPOが設立され、様々な大学や企業の受け入れを担うようになり、東京農業大学の他、法政大学や中央大学と連携してプロジェクトを行うなど、多様な外部支援者が流入している。また、2011年に地域おこし協力隊の受け入れを開始し、2018年1月時点までに21名が活動し、現役隊員と任期を終えた隊員の計18名が小菅村に居住している。地域おこし協力隊は、その半数がNPO職員として雇用されており、大学生・卒業生をはじめとした外部支援者の受け入れ事業の運営に携わっているため、外部支援者との関わりが村内で最も多い立場にあるといえる。

3章 大学生・卒業生の通いによる地域としての状況変化

3-1 交流プログラムとしての協働実態

(1) 源流大のプログラム内容と協働形態(図5)

源流大の農林業実習を履修する学生は、土日を利用して1泊2日で小菅村に通い、畑作業や森林の整備作業、文化体験等を通して

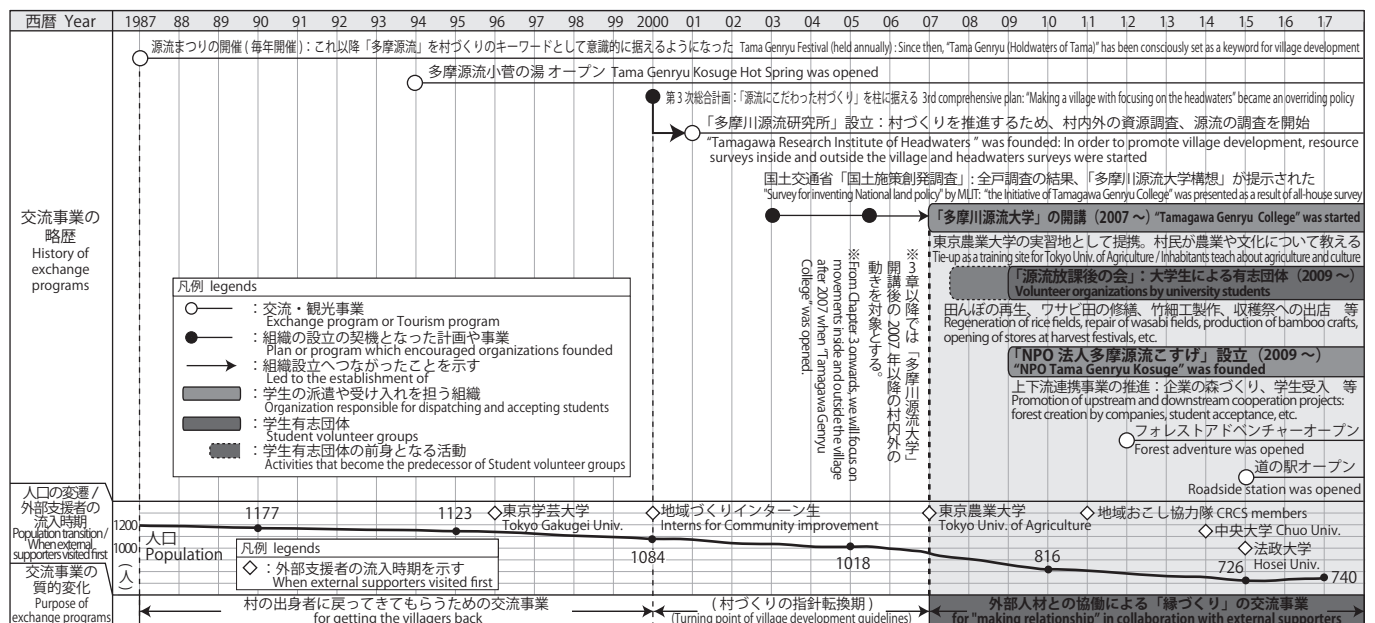


図4 対象地における交流事業の変遷<sup>注7)</sup> Fig. 4 Transition of exchange projects in the village

履修 Progress	コース Course	来訪回数 Number of visits	平均人数 Average number of students	内容 Content	協働形態 Forms of collaboration
1年目 1st year	基礎 Basics	年間3回 3 times/year	61	畑作業、森林整備作業、文化体験、源流体験 Farmwork, forest maintenance work, cultural experience, headwaters experience	住民に数十人で教わる taught in a big group by inhabitants
2年目 2nd year	応用 applications	年間5回 5 times/year	19	(毎年異なるテーマ) Learn agriculture with the same inhabitants for a year 異なるテーマで毎年 Different themes every year 散害対策や特産品開発など measures for repelling animals, special product development, etc.	住民個人や自宅に少人数で教わる taught in a small group by inhabitants 住民との交流が少ない Little interaction with inhabitants
3年目 3rd year	エキスパート Expert	規定なし No provision	不明 No data	学生が各自で研究・提案のテーマを設定する Students set their own research and proposal themes	規定なし No provision

※平均人数とは、2008年～2017年までの10年間の平均受講人数を示している。  
It indicates the average number of students attending for 10 years from 2008 to 2017.

図5 源流大プログラムの内容と協働形態

Fig. 5 Contents of Genryu College program and forms of collaboration

村での暮らしや自然を体験する。村民が講師を務めるため、実際の村の生活について話を聞くことができる。履修人数は年間約80名であり、数十名に分けて年間3～5回の実習機会があるため、春から秋にかけて毎週末学生が地域にいる状況が生まれている。また、「応用コース」では、年間を通して同じ村民講師から農業を学ぶ場合もあり、少人数での複数回にわたる交流機会が生まれていることがわかった。以上より、源流大プログラムにより【A-1】地域に学生がいる状態、【A-2】学生と住民の交流機会、という大きく2つの状況が地域内に生まれていることが明らかになった。

### (2) 源流大プログラムの運営体制 (図6)

源流大プログラムの運営は、地域内事務局員と地域外事務局員が連携して行っている。地域内事務局員は、実習プログラムの考案、村民への講師依頼やスケジュール調整等を行い、地域外事務局員は、参加学生への連絡、実習地までの同行等の役割を担っている。

### 3-2 学生有志団体としての協働実態

#### (1) 学生有志団体「放課後の会」の活動内容と協働形態 (図7)

「放課後の会」は、源流大プログラムを受講した1期生4名が設立した有志団体である<sup>注13)</sup>。現在の放課後の会としての主な活動は、「田んぼの再生」、「収穫祭への出店」があり(「畑の再生」は2017年より休止中)、会の学生は2週間に1～2回程度小菅村を訪れて活動している。また、「収穫祭への出店」では、東京農業大学の学園祭への出店協力依頼や野菜の買い取りなどで担当学生が各農家に訪問するため、年3～4回の交流機会がある。

以上より、放課後の会の活動により、【B-1】学生の定期的な来訪、【B-2】学生と住民の交流が深まる機会、という大きく2つの状況が地域内に生まれていることが明らかになった。

#### (2) 学生有志団体「放課後の会」の運営体制 (図8)

放課後の会に所属している学生は、主に土日を利用して小菅村に通い、農作業を中心とした活動を行っている。中心メンバーである学生が大学事務局員に相談しながらスケジュールを組み、メーリングリストやSNS等を用いて他の学生に情報を共有し、毎回の活動ごとに参加者を募っている。放課後の会には入退会に関する明確な規約がなく、正確な所属人数は不明だが、SNS等の連絡網には30名ほどが加入している。

### 3-3 有志団体の活動から発展した大学生・卒業生と住民の協働実態

調査ⅣのAより、図9のような大学生・卒業生の学生有志団体の活動から発展した協働がみられ、行事への参加や作業の手伝い、アルバイトを通して協働を行っていることが明らかになった。

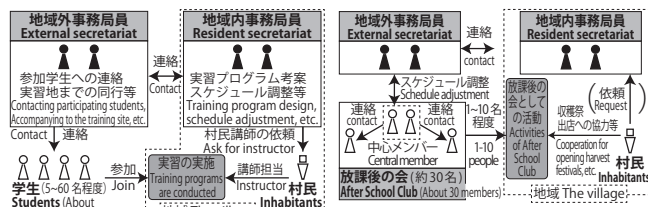


図8 放課後の会の運営体制

図6 源流大プログラムの運営体制 Fig. 8 Management system of After School Club Fig. 6 Management system of Genryu College program

開始年 Start year	活動内容 Activity content	活動頻度 Activity frequency	人数 Number of students	活動の詳細 Detail of activity	協働形態 Forms of collaboration
2008	田んぼの再生 Regeneration of rice fields	毎週末～隔週末 Every weekend ~ Every other weekend	1～10	米の栽培や田植えイベント企画等 Rice cultivation, rice planting event planning, etc.	住民が見に来る Inhabitants come to see activities
2008	畑の再生 Regeneration of fields	毎週末～隔週末 Every weekend ~ Every other weekend	1～10	様々な野菜の栽培 Growing various vegetables	住民が見に来る Inhabitants come to see activities
2009	収穫祭への出店 (学園祭での野菜販売) Sales of vegetable made in the village, at the school harvest festival	10月の開催に向け準備を行う Preparing for October sales	30程度 about 30	農家の住民に出店協力依頼をし、収穫作業や野菜の買い取り、販売準備などを分担して行う Asking farmers in the village to cooperate in store opening, and share the work of harvesting, buying vegetables and preparing for sales	担当学生が農家に春から秋にかけて3～4回訪問する Students in charge visit farmers 3-4 times from spring to autumn

【B-1】学生の定期的な来訪 Regular visits by students  
2週間に1～2回、継続して各学生が地域に訪れる。  
By visiting the village once or twice every two weeks, the number of visits to the village in each student is accumulated.

【B-2】学生と住民の交流が深まる機会 Opportunities to deepen exchange b/w students and inhabitants  
同じ住民のところに複数回訪問し、共同作業を通して交流が深まる状況ができています。  
By visiting the same inhabitants many times and working together, the exchange deepens.

※1 人数とは、放課後の会のメンバーの全数約30人のうち、各活動に参加する人数を示している。  
It indicates the number of participants in each activity out of 30, the total number of members of After School Club.  
※2 2017年は休止された。The activities in 2017 were suspended.

図7 学生有志団体「放課後の会」の活動内容と協働形態

Fig. 7 Activity contents of student volunteer group "After School Club" and forms of collaboration

ID	開始年 Start year	大学生・卒業生の活動内容【件数】 USGS' activity content Number	①協働の目的 ① Purpose of collaboration	②交流相手 ② Exchange partner
1a	2008	村民体育祭への参加 Joining the villager sports festival [8]	地域行事やイベントの人手確保 Securing human resources for local events	住民と来訪者 Inhabitants and visitors
1b	2008	源流祭の手伝い Helping in the Genryu festival [8]		
1c	2011	盆踊りへの参加 Joining in the Bon dance [4]		
1d	2011	親子キャンプの手伝い Helping in the parent and child camp [2]		
1e	2011	トレイルランの手伝い Helping in the trail running [2]		
2a	2010	キャンプ場施設の手伝い Helping at the camping facilities [2]	施設運営の人手確保 Securing human resources for facilities operation	住民と来訪者 Inhabitants and visitors
2b	2012	村歩きイベントの運営 Management of the village walking event [4]	交流の場作り Creating a place for interaction	住民と来訪者 Inhabitants and visitors
2c	2012	他出者のワサビ田手伝い Working the former inhabitants' wasabi fields [4]	農作業の人手確保 Securing human resources for farm work	農家の住民 Farmers in the village
3a	2012	森林作業の手伝い Forestry help [1]	農作業の人手確保 Securing human resources for farm work	農家の住民 Farmers in the village
3b	2012	農作物の収穫の手伝い Helping in crop harvesting [4]	農作業の人手確保 Securing human resources for farm work	農家の住民 Farmers in the village
3c	2013	レジャー施設のアルバイト Part-time job at leisure facilities [3]	施設運営や団体活動の 人手確保 Securing human resources for facilities operation and group activities	住民と来訪者 Inhabitants and visitors
3d	2013	民宿の手伝い Helping the guest house [2]		
3e	2014	物産館でのアルバイト Part-time job at the product promotion center [1]		
3f	2014	村内婚活イベントの手伝い Helping in the marriage hunting event [1]		
3g	2016	ビーチバレー大会出場 Joining the Beach volleyball competition [1]	特産品の売上向上 Increasing sales of local products	農家以外の住民 Inhabitants except the farmers
4a	2017	地ビールの取引先の紹介 Introducing trading partners of local beer [1]		

【C-1】人手不足の活動における協働 Cooperation in activities lacking manpower  
地域行事や農作業、施設運営等に携わっている。  
Contributing to regional events, farming and facilities management

【C-2】農家以外の住民を含む交流 Exchange including inhabitants other than farmers  
様々な職業の多世代の住民と交流する機会がある。  
There are opportunities to interact with multi-aged inhabitants of various occupations.

図9 学生有志団体の活動から発展した協働の種類と目的および交流相手  
Fig. 9 Type and purpose of Cooperation developed from the activities of student volunteer group, and exchange partner

①協働の目的に着目すると、【C-1】人手不足の活動における協働が多くみられ、②交流相手に着目すると、【C-2】農家以外の住民を含む交流が発生していることがわかった。

### 3-4 小括：大学生・卒業生の通いによる地域としての状況変化 (図10)

大学生・卒業生の通いによって地域内にもたらされた大きな状況変化が6つみられた。まず、交流プログラムの開始により【A-1】地域に学生がいる状態、【A-2】学生と住民の交流機会が生まれた。次に、学生有志団体の活動により、【B-1】学生の定期的な来訪、【B-2】学生と住民の交流が深まる機会が生まれた。さらに、大学生・卒業生と住民の学生有志団体の活動から発展した協働では、【C-1】人手不足の活動における協働が多くみられ、【C-2】農家以外の住民を含む交流が発生していることが明らかになった。

学生有志団体の活動や学生有志団体の活動から発展した協働は、



図 10 地域としての状況変化 Fig. 10 changes in the situation of the village

交流プログラムにとどまらない大学生・卒業生と住民の交流機会であると同時に、大学生・卒業生の力を地域に活かすことができる機会であることが確認できた。

#### 4章 大学生・卒業生の地域に通うモチベーションの向上プロセス

##### 4-1 大学生・卒業生の通いの目的の変遷 (図 11)

本節では、大学生・卒業生の地域へ通い始めてからの目的の発生の有無や目的の明確化について全体としての傾向を明らかにする。

##### (1) 段階 1: 学生有志団体の活動を名目として交流を広げる

通いの初期段階 (およそ通い 1 年目) では、学生はメーリングリストや大学事務局員のいる大学の事務所で放課後の会の活動を知らされ、同級生や先輩について行く形で田んぼや畑の活動を行っていたことが、会の設立者である S1 以外の 8 名全員で確認された。

S1 や S4、S7 のコメントにみられるように、放課後の会の活動を名目として地域に来訪しつつ、個人的な興味・関心による活動も行うことで、住民と交流する機会を持っている者もいたことがわかる。

##### (2) 段階 2: 地域に通う目的を探索・発見する

次の段階 (およそ通い 2~3 年目) として、放課後の会以外の活動へと個々の視野が広がり、地域に通う目的の探索や発見をしていることが 9 名全員で確認できた。学生有志団体設立当初から 5 年間 (2011 年以前活動開始) のメンバーでは、S2、S3、S4 のように、個人的に人に会いに行く中で通いの目的を探索する者がみられた。また、2012 年以降に活動を開始したメンバーでは、S5 や S7、S8 にみられるように、わさび田の活動や村内施設でのアルバイトなど、学生有志団体の活動から発展した協働自体が地域での役割の発見につながり、その後の通いの目的になっている者がみられた。

##### (3) 段階 3: 明確な目的を持って地域に通う

3 段階目 (およそ通い 4 年目以上) では、これまでに親交を深めた住民に会う目的を伴って頻繁に通う大学生・卒業生がみられる (S3、S5、S6、S8)。また、S1 や S4、S7 に関しては、卒業後に地域に居住する、地域で仕事をするといった選択をとっていることがわかった。なお、S9 に関しては、通い 2~3 年目時点で、趣味とイベントへの参加のためという目的が定まっていることが確認できた。これらより、9 名全員が明確な目的を持って主体的に地域に通

①大学生・卒業生の概要と活動参加理由 Overview of individual USGs and reasons for joining		②地域への通いの目的の変遷 Changes in the purpose of visiting the village				
ID	1. Activity start year 2. Age / Gender 3. One-way travel time 4. Most frequent visits	段階 1 (通い 1 年目) Stage 1 (1st year of visits)	段階 2 (通い 2~3 年目) Stage 2 (2-3rd year of visits)	段階 3 (通い 4 年目以上) Stage 3 (4th year of visits)	(地域に居住した契機) (Why he or she migrated to the village)	
S1	1. 2007 2. 28 / Female 3. About 2 h 4. 7 days or more / month	同期からの勧誘 「放課後の会」の活動への参加理由 Why he or she joined the activity of "After School Club"	仲間への同行 田んぼの活動のために通っていたので、村民の方に味噌作りなどを教わりに行くことも、結構あった。	自己実現に向けた通い 4 年生では、卒論のために通っていたけど、田で暮らすことが自分の夢にもなっていたし、もっと農的な暮らしをしてみたいと思って通っていた。	自己実現に向けた通い→地域に居住 小菅はつながりがもってきているし、基礎があるから、同期が住んでたし、源流大も手伝えるのかなと思って、ちょうど村の近くにやっていた仕事が見つかった。	
S2	1. 2009 2. 28 / Female 3. About 2 h 4. 15 times / year	先輩からの勧誘 初回授業の時、放課後の会の説明を受け、先輩にメーリングリストが回ってきた。	会の活動への参加 田んぼ、わさび畑などがあった。活動の時にメーリスが回ってきていて楽しかった。	自己実現に向けた通い 小菅に住んだら自分の生活を取り入れたいと思っていた。色んな人々と一緒に生活してみたい。友達も多くなっていいかな。	卒業生・卒業生先住した学生有志団体の活動から発展した協働 [2a] Helping at the Camp facilities [2b] Management of the village walking event [3b] Helping in crop harvesting [3f] Helping in the marriage hunting event	
S3	1. 2010 2. 26 / Female 3. About 2 h 4. Every Weekend	活動内容の魅力 初回授業で新入生歓迎会の田おこしの告知があり、参加したはまってしまった。	先輩の活動への同行 村に行けば先輩と一緒で、一緒に活動していく感じがいい。村の人とたくさん繋がりがあがる。	住民に会うための通い 特に村で何か活動する機会はないけど、年に数回お世話になった人に会いに行く。もう自分のおなじい人にならないうちに会いに行くことにした。	[2a] Helping at the camping facilities [3d] Helping the guest house	
S4	1. 2011 2. 25 / Male 3. About 3 h 4. 40 times / year	活動内容の魅力 山に毎週行くことで、授業だけでは毎週来ることができなかった。毎週来てくれる人がいると嬉しい。	会の活動への参加 収穫祭の準備と畑や田んぼの活動がほとんど。みんなで行くっていい。R1 さんがやらせてくれるから、ほぼ毎週来ていた。	自己実現に向けた通い 4 年生の時はずっと通っていたけど、いつか行ってみたいと思って。村の人の暮らしについて話せる機会が増えてきた。今、小菅村に月に 2 回くらい通って村の人と一緒に仕事をしている。	[1d] Helping in the parent and child camp [2b] Management of the village walking event [3a] Forestry help [3c] Part-time job at leisure facilities	
S5	1. 2012 2. 25 / Male 3. About 4 h 4. More than twice a month	活動内容の魅力 同級生の友達と 1 年先に放課後の会に入っていた。面白かった。	先輩の活動への同行 2 年目の時は先輩と田んぼをやっていた。この先輩のためなら力になりたい。	地域での役割の発見 (発協) 学生の時は必要ないというのが大きかった。M さんのわさび田の手伝いも 4 年生のときから始めた。僕も作業内容を覚えてくれた。	住民に会うための通い 今は結構知り合いができたから、知り合いや友達に会いに行く感じ。週 1 で通うくらいがちょうどいい。日予定空いてる。じゃあ小菅村へ！みたいな。	[2c] Working the former inhabitants' wasabi fields (50 times or more in total)
S6	1. 2013 2. 23 / Female 3. About 2 h 4. 20 times / year	先輩からの勧誘 プレ講習のときに、先輩たちが声をかけてくれた。次の活動に行くことになった。	先輩の活動への同行 1 年生の頃は S2 先輩のうしろをくっついてまわっていた。私の師匠みたいな方。	住民に会うための通い 村の人たちと関わることで、ものづくりが好きになり、色んな村の人のところに行くのも楽しくなっていました。	[1d] Helping in the parent and child camp [2b] Management of the village walking event [3b] Helping in crop harvesting [3c] Part-time job at leisure facilities [3d] Helping the guest house	
S7	1. 2014 2. 22 / Male 3. About 1 h 4. 25 times / year	集会所の存在 源流大の初めての来訪の時に先輩に誘われ、活動に来るようになった。事務局にいるのが楽しかった。	趣味と会の活動への参加 放課後の会の活動より釣りが多い。源流大の活動は少ない。M さんは今、源流大にいて、僕の方が遅いから来た。たまにわさび田を見て、状況を教えます。	源流大の運営の担い手としての通い 大学事務局の人に相談の話を聞いて、源流大に来てもらって、最終的には別の仕事に就いたけど、源流大の運営は僕がやるつもりです。源流大が何かやるってならお手伝いしたいと思って。	[2c] Working the former inhabitants' wasabi fields	
S8	1. 2014 2. 22 / Female 3. About 1 h 4. 20 times / year	集会所の存在 1 年生の 9 月か事務局に入りますようにになり、先輩ともつながり、小菅村での活動を始めた。	会の活動への参加 先輩たちがメーリスで活動の情報を流してくれるので、先輩たちにくっついて回っていた。	住民に会うための通い 卒業してから月に一回の楽しみとして自分で設定している感じです。色んな活動に参加して顔見知りになって次に来たときに顔出してまた仲良くなって、みたいな。	[1a] Joining the villager sports festival (4 consecutive years) [1b] Helping in the Genryu festival (4 consecutive years) [2b] Management of the village walking event [3b] Helping in crop harvesting [3c] Part-time job at leisure facilities [4a] Introducing trading partners of local beer	
S9	1. 2014 2. 22 / Male 3. About 4 h 4. 6 times / year	集会所の存在 事務局に 4 年間ずっと授業の空きコマに行っていたので、参加しているという感じ。	会の活動への参加 1~2 年生の時は田んぼや畑を管理していた。事務局で活動をして、先輩と繋がった。	趣味とイベントへの参加 釣りや体育祭、源流祭りなどイベントごとや面白いことがあるときに誘われて、わさび田の手伝いもしたことがある。	[2c] Working the former inhabitants' wasabi fields [3c] Part-time job at leisure facilities	
地域での活動目的の変遷からみる全体の傾向 Overall trends from the perspective of changes in the purpose of activities in the village		学生有志団体の活動を名目として交流を広げる Expanding exchanges in the name of the activities of student volunteer group	地域に通う目的を探索・発見する Exploring and discovering the purpose of visiting the village	明確な目的を持って地域に通う Visiting the village with some clear purpose		

図 11 大学生・卒業生の地域への通いの目的の変遷 Fig. 11 Changes in the purpose of USGs' visiting the village

大学生・卒業生へのヒアリング項目 (調査IV-C①～③) Hearing items for USGs (Surv. IV-C①～③)		
①「また行きたい」、「協力したい」という気持ちが高まったこと Scenes where the desire to go to the village again or to contribute to the village rose	②村民の方との関わりで嬉しかったことや印象に残っていること Episodes where he or she felt happy or impressive in relationships with the inhabitants	③1人で地域に通うようになった理由やきっかけ Why he or she became a frequent visitor to the village
<b>活動が住民に喜ばれる</b> Inhabitants got pleased with his or her activities [1] ・村歩きイベントを企画して運営した時に、住民の人が外からお客さんか来ることを喜んでくれたり、楽しんでいると言ってくれたことが嬉しかった。(S2)	<b>普段体験できないことを体験させてもらう</b> Let experience what he or she cannot usually do [3] ・味噌作りや畑、料理の仕方、昔のおやつなどを教えてもらったこと。(S3) ・(住民の)Mさんがわさび田に連れて行ってくれたとき。なかなか見られるものではないので。(S6) ・R1さんに「むかしもろこしドーナツ」を食べさせてもらったとき、昔食べていたものを食べさせてもらったときは嬉しい。(S6)	<b>責任・役割を果たす</b> To fulfill his or her responsibility or role [2] ・2年生になって、畑を任されていたから、1年生のときは、やりたいとはあっても1人ではどう動いていいかわからなかった。(S3) ・フォレストのバイトをきっかけに、先輩がバイトして面白そうだったので、K1さん(協力隊)に言ってみた。それからGWとお盆に毎年手伝っています。(S8)
<b>先輩から影響を受ける</b> Influenced by seniors [1] ・田んぼをやって、(先輩の)Fさんの人柄に惹かれ、Fさんのためなら一緒にやろうと思った。(S5)	<b>住民に個人として必要とされる</b> Needed as an individual by inhabitants [2] ・(元協力隊の)Jさんにバイトやらない?と言われたこと。外部の人間なのにもお願いをされて、一歩踏み込んだ感じを持っているのが嬉しい。(S2) ・今年の4月に(住民の)Mさんにわさび田を3枚任せられたこと。(S5)	<b>住民に個人として必要とされる</b> Being needed as an individual by inhabitants [1] ・わさび田をMさんと一緒にやるようになった1年生の11月から、Mさんが個人的にメールで誘ってくれたから。(S7)
<b>住民との信頼関係を構築する</b> Building a relationship of trust with inhabitants [3] ・1年生の夏休みにフォレストでバイトして1人で帰っているときに「みんな親切だな、また行きたいな」と思った。ひと夏経てて仲良くなったのを実感した感じ。(S6) ・2年生の8月、9月にフォレストでのバイトや卒業をきっかけに、自分で知り合いを増やせたので。(S8) ・信頼関係ができあがったのは体育祭と源流祭りだと思う。年々行くたびに知っている人が増えて、源流祭りではこの人に会える、体育祭ではこの人に会えるっていうのがあるから、やっぱり積み重ねが大きいですね。(S8)	<b>住民の一員になったと感じる</b> Feeling that he or she became a member of inhabitants [2] ・村民体育祭はみんなで一体化できるので印象に残っている。源流祭りは体育祭で繋がった人と再会できるので嬉しい。(S8) ・住民の)Yさんと柿取りや梅取りした。実習とは違って、なんとなく短期間の村民になれる感じがする。(S7)	<b>個人としての存在を認知される</b> Recognized as an individual [1] ・2年生になって、1人で歩いていても声をかけてもらえるようになったから。道を歩いていて急に呼び止められてきのもあったりとか。(S4)
<b>住民との個人的な信頼関係を構築する</b> Building a personal relationship of trust with inhabitants [3] ・R4さんと収穫祭のために連絡先を交換していたけど、「おそばたくさん作ったんだけどどう?」とか、「けんちん汁あったけど?」とか公私混同状態。(S3) ・R7さんと仲良くなってからもっと農業したいと思うようになった。(S5) ・聞き取り調査で8軒話を聞いて、顔見知りになったので次に行ったときに顔出してさらに仲良くされた。いろんなことを自分で把握できるようにになった。人の名前とか家とか家族関係とか。(S8)	<b>個人としての存在を認知される</b> Recognized as an individual [2] ・橋立地区のお祭りで「これ食べよ」って食べ物もらって輪の中に入れてもらったこと。(S4) ・名前をちょっと覚えられて嬉しかったですね。他にも学生はいっぱいいるだろうに、ちょっとでも僕のことを覚えてくれたら嬉しい。(S7)	<b>活動の名目ができる</b> Being able to behave under a nominal activity [2] ・大学の事務局員さんと小菅でばったり会って、「実習にふらっと参加していいよ〜」と言われたことで、「いいんだ」と思っに行くようになった。(S2) ・小永田地区へ卒論調査へ行つたとき。特別1人で行かないといけない用事の時だけ行く。家から時間とお金がかかるので。(S9)
<b>先輩の子供が生まれる</b> A child is born to his or her senior [1] ・(小菅に住んでいる)農家の先輩2人の子供が生まれたとき、子どもが好きで、かわいかったから。(S7)	<b>交通手段ができる</b> Getting means of transportation [2] ・社会人になってバイクで行けるようになったから。(S2) ・車の免許を持っているので1人でも乗れるので、基本的に人に迷惑をかけたくない。(S7)	

図 12 大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因 Fig. 12 Factors that enhance USGs' independence and continuity of visits

ていることがわかった。

#### 4-2 大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因 (図 12)

本節では、大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因を把握するため、「地域に通う目的を探究・発見すること」や「明確な目的を持って地域に通う」ことにつながった契機や出来事について、大学生・卒業生へヒアリング調査 (調査IVのC項目) を行った。

##### (1) 要因1: 活動自体のやりがい

9名中5名が、活動が住民に喜ばれることや、普段体験できないことを体験させてもらう、責任・役割を果たすなど、学生有志団体の活動から発展した協働を通して「活動自体のやりがい」を得ていることが把握できた。

##### (2) 要因2: 住民に受け入れられている実感

9名中7名が、住民との信頼関係を構築することや、住民に個人として必要とされること、住民に個人としての存在を認識されることなどの、「住民に受け入れられている実感」を学生有志団体の活動から発展した協働や個人的な交流を通して得ていることが把握できた。「住民に受け入れられている実感」は、大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因の大部分を占めていることがわかった。

#### 4-3 小括: 大学生・卒業生の地域に通うモチベーションの向上プロセス

本章で明らかになった傾向を図 13 に示す。9名の大学生・卒業生は概して、学生有志団体の活動を名目として交流を広げ、それぞれの地域に通う目的の探求や発見をし、明確な目的を持って地域に通うようになるという傾向があることがわかった。大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高める要因のうち、「活動自体のやりがい」は学生有志団体の活動から発展した協働を通して得られ、地域に通う目的の探求や発見につながりやすい傾向があるといえる (S3、S5、S8 の図 12 および図 11 の段階1、段階2 のコメントより)。また、「住民に受け入れられている実感」は、学生有志団体の活動から発展した協働や個人的な交流を通して得られ、地域に通う

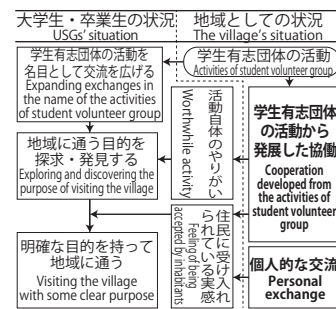


図 13 大学生・卒業生の通いのモチベーション向上プロセス Fig. 13 Process of improving motivation for USGs to visit the village

目的の探求や発見および明確な目的を持って地域に通うことにつながりやすい傾向があることがわかった (S3、S4、S5、S6、S7、S8 の図 12 および図 11 の段階2、段階3のコメントより)。以上より、学生有志団体の活動から発展した協働および個人的な交流を生むことは、大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高め、大学生・卒業生と住民の協働の継続化を図る上で重要と考えられる。

## 5章 住民からみた大学生・卒業生の通いによる影響 (図 14)

### 5-1 地域に学生がいる状態による影響

R4、R5、R6、R9 のコメントより、地域に学生がいる状態そのものによって心強さを感じている住民がいることがわかった。

### 5-2 度重なる交流機会による影響

9名中7名の住民が、度重なる交流機会による影響を感じていることが確認できた。「大学生・卒業生に対して親しみを感ずる」、「大学生・卒業生を肯定的に捉える」といった影響がみられた。

#### (1) 大学生・卒業生に対して親しみを感ずる

9名中7名の住民が大学生・卒業生に対して親しみを感ずることが確認できた。項目①と②に対する R1 や R3 のコメントにみられるように、住民は大学生・卒業生との親密な交流の時間をもち、

住民へのヒアリング項目 (調査V-A①～③) Hearing items for inhabitants (Survey V-A①～③)		
①大学生・卒業生のおかげで助かったこと、大学生・卒業生と関わって嬉しかったこと Episodes where USGs helped him or her and where they made him or her happy	②大学生・卒業生と関わって変わったこと (個人の意識や行動) What has changed in relationships with USGs (individual consciousness and behavior)	③大学生・卒業生が村に入ったことによる身近な村民や村全体としての変化 Changes in his or her familiar inhabitants or the village as a result of USGs' starting to visit
<b>大学生・卒業生に対して親しみをを感じる [8]</b> <b>Feeling familiar with USGs</b> ・何より若い人と関わっていると <b>退屈しない</b> ことがいいな。(R1) ・若い人の考えてることが少しずつわかるし、 <b>学生といくと世界が広がる</b> ね。(R1) ◎ <b>わざわざ来て声をかけてくれたりする</b> 、そういうことがやっぱり歳をとれば嬉しいね。「おじさん元気でよかったね、足は大丈夫ですか?」と言ってくれたよ。(R2) ◎ <b>学生が個人的な相談をして</b> くることもあったね、一緒にごはん食べようというと言ってくれて、何でもよく食べるので嬉しかった。(R3) ◎ <b>宿の手伝いをしてくれた子が挨拶してくれるのは嬉しい</b> 。(R5) ◎ <b>学生が声をかけてくれたり、成長したな</b> と思ったりきたり、人間のな部分を成長させてやりたいと思っているので。(R6) ◎ <b>若い子に元気をもらって</b> いるのはあるけど、腰が痛くてそんな痛いそぶりを見せるわけにはいかないでしょ。(R7) ・ <b>あちこちで行き会</b> うと「あ、おじさん!」と言ってくれるからな。源流祭りのときも「おじさん、三ヶ村のお祭りのときに歌うってたんだね」といわれたり。(R8)	<b>大学生・卒業生に対して親しみをを感じる [2]</b> <b>Feeling familiar with USGs</b> ◎家でぼーっとしなくなった。 <b>去年の終わり頃から毎回一緒に夕食を食べるようになった</b> ね。(R1) ・ <b>一緒に作業することで若い人の考え方がわかった</b> 。若い人たちの気持ちは100%ではないけれど大切に思う。そういうのがわかっていれば接することができる。(R6)	<b>心強さを感じる [4]</b> <b>Feeling reassuring</b> ・ <b>隣村とかよ</b> から見て「 <b>小萱は活気があるな</b> 」っていわれる。イベントに学生が来て、道の駅もできたりしてにぎやかになった。(R4) ・ <b>近所のおばあちゃんたちは学生がくるのが楽しみ</b> みたいよ。表を学生が歩くから、話せるからね。(R5) ・ <b>村全体が明るくなった</b> ね。若い人たちの声が聞こえてくるのは <b>歳をとった人たちからすると心強さがある</b> んだよね。(R6) ・生活上は別にいい気はするけど、 <b>若い人が歩いていけばいいわよね</b> 。(R9)
<b>学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる [3]</b> <b>Feeling gratitude for cooperation developed from the activities of student volunteer group</b> ・あまり技術がいらぬに聞かしては <b>草取り、収穫とか</b> 、助かってよ。(R1) ◎ <b>大勢でうらもろこしが倒れないようにパイプを支えたり</b> 、歳をとれば力がなくなるから重いものを持ち上げてくれると助かる。(R2) ◎ <b>人手が足りない時に宿の手伝いに来てくれるのは助かっているよ</b> 。(R5)	<b>学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる [2]</b> <b>Feeling gratitude for cooperation developed from the activities of student volunteer group</b> ◎(宿の人手不足で)困ったときに、村の人に聞かないで学生に先に頼むようになった。 <b>おかげで安心してやるようになった</b> ね。(R5) ・ <b>普段はお客さんの声を聞かないから</b> 。(収穫祭の後に)こうでした、ああでした、とお客さんの声を伝えてくれると <b>普段と違う世界を味わえる</b> ね。(R9)	<b>大学生・卒業生を肯定的に捉える [2]</b> <b>Feeling positive about USGs</b> ・温泉に来たお客さんからも、若い人と一緒に作業していると「いいねえ〜」と言われる。作業場所を温泉の脇の畑にしていたのは、外から来たお客さんに <b>若い人と一緒にやるのが見えないら</b> いだろうと思つたので、 <b>村の人たちの気持ちは暗くなってたけど、明るくなって来た</b> と思う。(R6) ・要するに、 <b>学生が入って村が変わった</b> っていうことよ。 <b>明るくなった</b> 。学生が言葉をもんなにかけるでしょ。初めはよ者を嫌がったけど、 <b>だんだん慣れて、今は移住者がいっぱいいても小萱の人たちはあたたかく迎えて</b> るわけね。それは学生が入ったおかげでそうなったんじゃないかな。(R7)
<b>学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる [3]</b> <b>Feeling gratitude for cooperation developed from the activities of student volunteer group</b> ・あまり技術がいらぬに聞かしては <b>草取り、収穫とか</b> 、助かってよ。(R1) ◎ <b>大勢でうらもろこしが倒れないようにパイプを支えたり</b> 、歳をとれば力がなくなるから重いものを持ち上げてくれると助かる。(R2) ◎ <b>人手が足りない時に宿の手伝いに来てくれるのは助かっているよ</b> 。(R5)	<b>学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる [2]</b> <b>Feeling gratitude for cooperation developed from the activities of student volunteer group</b> ◎(宿の人手不足で)困ったときに、村の人に聞かないで学生に先に頼むようになった。 <b>おかげで安心してやるようになった</b> ね。(R5) ・ <b>普段はお客さんの声を聞かないから</b> 。(収穫祭の後に)こうでした、ああでした、とお客さんの声を伝えてくれると <b>普段と違う世界を味わえる</b> ね。(R9)	<b>学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる [6]</b> <b>Feeling gratitude for cooperation developed from the activities of student volunteer group</b> ・(昔一緒に仕事してた甲府の人に)「あれだけの人口でよく毎週毎週イベントやるね」と言われる。 <b>体育祭とか源流まつりや地区のお祭りでも学生が入っているよ</b> 。(R1) ・村の行事に参加してくれるじゃなく、 <b>村民も皆ね、大勢の学生さんに来てもらって、体育祭とか源流祭りがにぎやか</b> にできる。(R2) ◎小泳田の神代神楽も踊ってくれた人もいるんだよ。 <b>毎年来てくれる人がいる</b> んだよ。あの子は学生の頃からきてるんでしょ。(R2) ・盆踊りとかは <b>盛り上がる</b> ね。私も調子で踊っちゃたり…。(R3) ・源流祭り、体育祭、盆おどりとか、 <b>学生がわーっと来てくれると感謝する</b> ね。地区の人にも「学生呼んできてよ」と言われるからねえ。(R5) ・神楽も、獅子舞も、三ヶ村のお祭りも手伝ってくれて、それは助かっているよ。 <b>にぎやかになるし、色々手伝ってくれるからね</b> 。(R8)
<b>特になし Nothing special [1]</b> ・特にはないかな、じゃがいも畑まで運んでくれないかと、そういうの頼んだりしかねえ。息子も若い人集がいるよ。(R4)	<b>特になし Nothing special [3]</b> ・特にはないと思うなあ。(R4、R7、R8)	
凡例 legends ◎ : 個人的な交流 (学生個人の名前が挙がった交流) を示す Show personal exchanges (interactions where the names of individual students are listed during the interview)		

図 14 大学生・卒業生の通いによる住民の状況変化 Fig. 14 Changes in the situation of inhabitants through USGs' visits

そのことが親しみを感ずることにつながっているとうかがえる。

## (2) 大学生・卒業生を肯定的に捉える

R6 および R7 のコメントより、度重なる交流機会がよそ者である大学生・卒業生を肯定的に捉えることにつながっている住民もいることがわかった。

### 5-3 学生有志団体の活動から発展した協働による影響

9 名中 6 名の住民は、学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じている面があることがわかった。項目①の R1、R2、R5 のコメントより、大学生・卒業生が農業や村内施設などの手助けになっている部分があることがわかった。また、項目②の R5 のコメントのように、学生有志団体の活動から発展した協働から住民が安心感を得ていること、R9 のコメントのように、学生有志団体の活動から発展した協働により普段聞かない訪客の声を聞くことができている、ということを確認できた。さらに、項目③の R1、R2、R3、R8 のコメントより、源流まつり(村全域での祭事)や村民体育祭、盆踊り、地区単位の祭事に大学生・卒業生が参加することによってにぎやかに行事を開催する一助となっていることがわかった。なお、ヒアリングを行った全ての住民から、調査Vにおいて大学生・卒業生の個人名が挙げられた。

### 5-4 小括: 住民からみた大学生・卒業生の通いによる影響 (図 15)

「地域に学生がいる状態」は「心強さを感じる」ことに、「度重なる交流機会」は「大学生・卒業生に対して親しみを感ずること」や「大学生・卒業生を肯定的に捉える」ことにつながりやすい傾向があることがわかった。また、「学生有志団体の活動から発展した協働」は、「学生有志団体の活動から発展した協働に対して感謝を感じる」ことにつながりやすい傾向があることが明らかになった。住民にとって、「学生が大勢来られると大変」という声もありつつも、大学生・卒業生の通いは全体的に好ましいことと捉えられており、どの住民からも大学生・卒業生の個人名が挙がっていることから、双方から見て親密な交流が行われていることを確認できた。

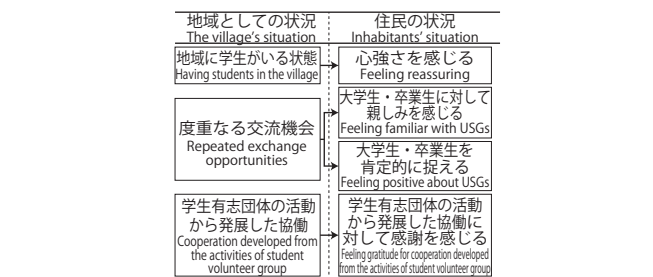


図 15 住民からみた大学生・卒業生の通いによる影響 Fig. 15 Effects of USGs' visits from the viewpoint of inhabitants

## 6 章 大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素

3 章～5 章よりわかった、地域としての状況変化(図 10)、大学生・卒業生の通いのモチベーション向上プロセス(図 13)、住民から見た大学生・卒業生の通いによる影響(図 15)をまとめる(図 16)。

3 章より、学生有志団体の活動や学生有志団体の活動から発展し

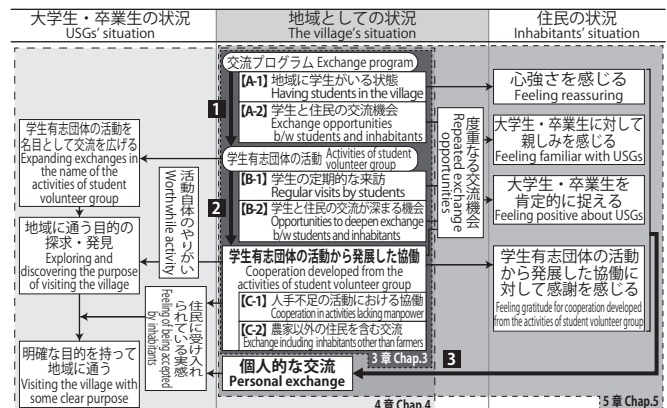


図 16 大学生・卒業生の地域への通いによる、地域、大学生・卒業生、住民の状況変化と相互の関連性 Fig. 16 Changes in the situation of the village, USGs and inhabitants through ESS' visiting the village, and their reciprocity

た協働は、交流プログラムにとどまらない大学生・卒業生と住民の交流機会であると同時に、大学生・卒業生の力を地域に活かすことができる機会であることが確認できた。また4章より、大学生・卒業生の通いの主体性および継続性を高めるためには、学生有志団体の活動から発展した協働と個人的な交流を生むことが重要であることがわかった。さらに5章より、住民は、大学生・卒業生の通いを全体的に好ましいことと捉えており、住民と大学生・卒業生の双方から見て親密な交流が行われていることを確認できた。

以上をふまえて本章では、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素を抽出するため、以下3点を明らかにする。

- 1 学生有志団体の活動の継続のための工夫 (6-1)
- 2 学生有志団体の活動から発展した協働を生む要素 (6-2)
- 3 個人的な交流を生まれやすくする要素 (6-3)

### 6-1 学生有志団体の活動の継続のための工夫

交流プログラムに参加した学生が、有志活動を組織化し、継続させる上で必要となった要素を調査ⅡおよびⅢより明らかにする。

#### (1) 役割分担のある活動が毎年引き継がれる仕組みづくり

有志活動開始から約1年後、後輩への田んぼ・畑の引継ぎのため活動を組織化することとなり、その際、地域外務局員が「収穫祭への出店」を活動に取り入れることを提案していたことがわかった。これにより、団体名や役割分担等が必要となり、毎年引き継がれる仕組みづくりがなされ、活動として定着した。

#### (2) 住民からも認知・応援される活動の取り入れ

前述の「収穫祭」は、各農家への出店協力依頼や野菜の買い取りなどで年3～4回程度、住民との交流を持ちながら準備を進めるため、住民からも活動が認知・応援されやすかったことがうかがえる。なお、収穫祭への出店協力は、住民にとっても感謝の気持ちが生まれるということもうかがえる(図14②R9のコメント、図19のR2、R8、R9のコメント)。

#### (3) 活動に興味のある学生が集える相談相手の居る拠点の開放

交流プログラムを開始した当初より、地域外務局員による「学生が村でやってみたいことを相談できるように大学構内の事務室を開放していた」という工夫があったことが明らかになった。実際に、地域での活動に興味のある学生が集まりやすい環境をつくることにつながっていたことが大学生・卒業生へのヒアリング(図10の「放課後の会」の活動への参加理由)より確認することができた。

### 6-2 学生有志団体の活動から発展した協働を生む要素

調査Ⅳ・Ⅴより、一部の学生有志団体の活動から発展した協働において、大学生・卒業生の「地域の力になりたい」という主体性を後押しする存在があることが確認できたため、調査Ⅵより、そのような学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーター(協働の必要性の声が挙がってから実行までをサポートする者)の有無や動機を調査した。

#### (1) 学生有志団体の活動および学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーターの関与の変遷(図17)

学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーターの有無に着目すると、年を経るごとに地域外務局員の関与が徐々に少なくなっていることが明らかになった(図17①)。また、協働の提案者(②)は多様であるが、コーディネーター(③)については、



図17 学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーターの関与の変遷  
Fig. 17 Changes in the involvement of coordinators in Cooperation developed from the activities of student volunteer group

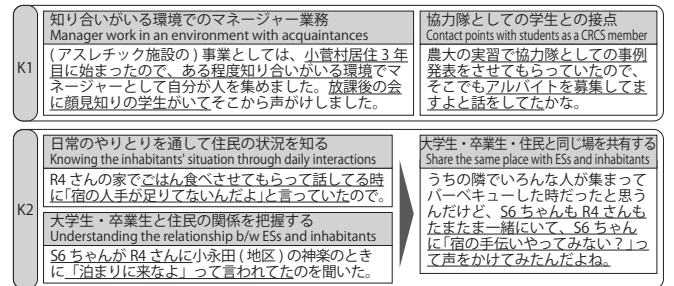


図18 協力隊・元協力隊がコーディネーターに至った経緯  
Fig. 18 Why CRCS or former CRCS member coordinated the cooperation

2013年以降は地域外務局員によるコーディネーターは無くなり、協力隊や元協力隊によって行われていることがわかった。さらに、協力隊・元協力隊によってコーディネーターされた学生有志団体の活動から発展した協働は村内施設での有償の手伝いやアルバイトであることがわかり、頻繁に来訪する大学生・卒業生を住民同等の人手として活用していることがうかがえた。

#### (2) 協力隊・元協力隊がコーディネーターに至った前提条件(図18)

2013年以降に複数みられる協力隊や元協力隊による学生有志団体の活動から発展した協働のコーディネーターについて、それが可能な状況を把握するため、協力隊・元協力隊がコーディネーターに至った経緯を調査した。

K1の場合、「知り合いがいる環境でマネージャーを務める」、「協力隊として学生との接点があった」という経緯があり、K2の場合、「日常のやりとりを通して住民の状況を知る」、「大学生・卒業生と住民の関係を把握する」、「大学生・卒業生・住民と同じ場を共有する」という経緯があったことが明らかになった。K1については、



協力隊独自の立場が寄与している面もあるが、両者ともに数年間地域に居住したことによる地域内外とのつながりがコーディネート的前提条件として活かしていることがわかる。

### 6-3 個人的な交流を生まれやすくする要素

住民と大学生・卒業生との交流において、住民からの大学生・卒業生へのアプローチの有無とアプローチの起こりやすい「住民個人の背景」と「大学生・卒業生との接点となる要素」を調査VBより明らかにする(図19)。

住民個人の背景は多様であり、R7やR9のように日常生活が忙しい場合、また、R8のように大学生・卒業生に作業を頼む難しさがある場合は、住民からのアプローチは起こりにくいことがわかる。また、大学生・卒業生との接点となる要素は、「活動拠点の近接性」、「第三者の仲介」、「プログラムの延長」、「収穫祭への協力」

の4つが見られた。中でも、「活動拠点の近接性」がある(大学生・卒業生の滞り場所や畑等と住民の自宅や職場が徒歩5分程度の距離に近接している)場合、住民からのアプローチが起こりやすい傾向にあることがわかった。

### 6-4 結論：大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素

本事例において、大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を高める要素として明らかになったことを示す。

#### 1 学生有志団体の活動の継続のための工夫

地域外事務局員が、大学で毎年開催される「収穫祭への出店」を活動に取り入れることを提案し、役割分担のある活動が毎年引き継がれる仕組みづくりを行っていたことが活動の定着に寄与していたことがわかった。ヒアリング結果より、「収穫祭への出店」は住民からも認知・応援されていることがうかがえ、これは、有志活動継続のモチベーションに有効に働くと考えられる。また、地域での活動に興味のある学生が集まれるように大学構内の事務所を開放し、在室する大学事務局員が授業の空き時間等に活動についての相談に乗れるようにしていたことも活動継続の上で有効に働いていたことがわかった。

#### 2 学生有志団体の活動から発展した協働を生む要素

大学生・卒業生が学生有志団体の活動から発展した協働に至るにあたって、住民との間を仲介するコーディネーターの存在があり、大学事務局員の他に、協力隊や元協力隊もコーディネーターとしての役割を果たしていたことがわかった。特に、協力隊や元協力隊が持つ「数年間地域に居住したことによる地域内のつながり」および「協力隊独自の立場による学生との接点」がコーディネートの条件として活かしていることがわかった。

#### 3 個人的な交流を生まれやすくする要素

住民と大学生・卒業生との交流において、「活動拠点の近接性」の要素が、住民からの大学生・卒業生へのアプローチの起こりやすさに寄与している傾向が捉えられた。特に、本事例では、大学生・卒業生の滞在・活動場所と住民の自宅や職場が徒歩5分以内の距離に近接している場合に、住民からのアプローチが起こっていた。

### 6-5 考察：大学生・卒業生の主体性および住民との協働における継続性を担保するための地域側の工夫

地域側が積極的に工夫できる点として、大学等との連携や都市農村交流プログラムの活用を行う場合に、協力隊や元協力隊を大学生・卒業生と住民の仲介役として活用するために、協力隊等の募集時に「交流プログラム等における学生の受け入れ」を業務内容の一部に組み込む等、継続的なシステムを構築することが考えられる。また、大学生・卒業生の活動場所と住民の活動場所の近接性を考慮し、徒歩5分以内程度の距離に設定することは、大学生・卒業生と住民の個人的な交流を生まれやすくする上で工夫できる点であるといえる。

### 6-6 研究の課題

今回調査を行った山梨県小菅村では、大学生を対象とした交流プログラムを契機とした大学生・卒業生と住民の協働が継続して見られたが、より汎用性の高い知見を得るため、大学生・卒業生に限らない外部支援者との協働方法の体系的整理を行うことが今後の研究の課題となる。

① 個々の住民の概要 Overview of individual inhabitants		② 大学生・卒業生と住民の個人的な交流の生まれやすさ Ease of personal exchange between USGs and inhabitants	
Inhabitant ID		大学生・卒業生との接点となる要素 Elements that serve as points of contact with USGs	大学生・卒業生との関わりに対する積極性とその場面 Aggressiveness and contexts for contact with USGs
1	Age / Gender		
2	Start point of exchanging		
3	Most frequent times	住民個人の背景 Personal background	
4	Main previous / current positions		
5	Accepting position		
R1	1 70s / Male 2 2007 3 2 days a week (SPR-AUT) 4 Official → Field work 5 Village instructor, Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	大学生・卒業生との共通点 Common point with USGs 自分がデスクワークが多くて外に出ることが少なかったから、一緒に精進してこうと思った。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases 家がゲストハウスに近いので、去年の終わりで毎週一緒に夕食を食べるようになった。
R2	1 80s / Male 2 2007 3 Once a week (maximum) 4 Farmer 5 Village instructor, Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	交流の意欲がある Willingness to exchange みなさんと交流することが歳をとれば嬉しいですね。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases (流石だが近いので)自然と生徒さんの中で、顔なじみになりました。
R3	1 70s / Female 2 2007 3 Twice a month (maximum) 4 Farmer 5 Village instructor, Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	交流の意欲がある Willingness to exchange お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases 初期は月に5000円で家の鍵を学生の宿泊のために貸していた。
R4	1 70s / Female 2 2007 3 Once a month 4 Guest house, Farmer Accommodation, Village instructor, Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	生活が地域で成立 Life is established in the village 宿が忙しくても普段は専門で頼む必要はないから学生に頼まなくてもいいわね。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。
R5	1 60s / Female 2 2012 3 2 days a month (SPR-AUT) 4 Guest house 5 Accommodation	人手不足の悩み Trouble of labor shortage 宿の人手に困っていたとき、村の仲の良い人に頼んだけど、それぞれ都合があるから。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。
R6	1 70s / Male 2 2009 3 Once a month 4 Agricultural Cooperatives → Village facilities 5 Village instructor	長年の農業経験 Years of agricultural experience ずっと農業に携わっていたから、苦労した話も聞ける。実際の話をすると学生は喜ぶね。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。
R7	1 70s / Male 2 2007 3 Once a month 4 Employee → Field work 5 Village instructor, Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	日常生活が忙しい Everyday life is busy 定年退職していたが、お年寄りができなくなると畑をいづつもやっていたから忙しかった。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。
R8	1 70s / Male 2 2010 3 3-4 times a year 4 Employee → Beekeeper 5 Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	作業を頼む難しさ Difficulties in asking for work いつ誰か来るのかわからないし、日に来て今日までずっとという仕事もないしね。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。
R9	1 60s / Female 2 2010 3 5 times a year 4 Mushroom farmer 5 Farmer opening a store every year at the Harvest Festival	日常生活が忙しい Everyday life is busy 専業でやっているから忙しくてね、自分からは聞かれないうね。	活動拠点の近接性 Proximity of activity bases お父さん(ご主人)を亡くした後だったので痛々しかったので、心強くなった。

図19 住民と大学生・卒業生との交流における住民のアプローチの背景  
Fig.19 Background of inhabitants' approach in exchanges b/w inhabitants and USGs

凡例  
Legend  
●: 大学生・卒業生との接点となる要素  
Elements that serve as points of contact with USGs  
●: 大学生・卒業生との関わりを促していると思われる要素  
Elements that seem to encourage contact with USGs  
※ 活動拠点の近接性に関する補足 supplementary note about proximity of activity bases  
R1: 徒歩5分以内(自宅と大学生・卒業生の宿泊するゲストハウス) within 5 min on foot (R1's house and the guest house where USGs stay)  
R2: 徒歩5分以内(自宅と大学生・卒業生の活動拠点である源流大学) within 5 min on foot (R2's house and Gennyu College (USGs' activity base))  
R3: 同敷地内(自宅と大学生・卒業生の宿泊用に使っていた離れ) Located on the same site (R3's house and R3's guest house where USGs stay)  
R4: 徒歩1分以内(自分の畑と大学生・卒業生が活動する畑) within 1 min on foot (R4's field and the field where USGs work)  
R6: 同敷地内(農場と学生が利用する温泉施設) Located on the same site (R6's workplace and the hot spring facility used by USGs)

注

- 注1) 参考文献1)において、「日本の総人口は減少過程にあり、すべての地域において人口増を目指すことはできない。…(中略)さらに地方創生の動きの中で多くの地域が総合戦略の策定に取り組んでいる。すでに人材獲得競争のような局面にあり、そうした流れは今後も強まることが想定される。しかし、人口という定量的指標だけでは、今後の地域社会を展望していくことは難しい。」と述べられている。
- 注2) 例えば参考文献2)における地元住民へのインタビューでは、「過去に移住して来られた方の中には地域住民と交流するのがあまり得意ではなく、地域の行事にも顔を出さなかった方もおられたので、地域住民としても積極的にサポートやお世話をしたいが実は迷惑になっているのではないか」という懸念があげられている。こうしたケースは、移住者が地域の足かせとなってしまっている事例の1つと考えられる。
- 注3) 外部支援者と地域の関係づくりを目的とする交流プログラムには、「地域づくりインターン(2000年〜)」や「学生人材バンク(2002年〜)」、「しまとアカデミー(2012年〜)」、「島キャン(2014年〜)」等がある。
- 注4) 参考文献6)では、自治体の中間支援組織が企画した取り組み(住民へのインタビューや地域でのインターン等)に多くの学生が複数回参加することで地域での交流機会を維持していた。しかし、学生からは地域との関係を模索しているという声が多く聞かれ、大学卒業後の社会人の立場から地域に貢献する難しさを訴える声が多くみられており、外部支援者の交流・協働への主体的な姿勢を継続させることが難しい様子がうかがえた。
- 注5) 「オーライ!ニッポン大賞」の受賞団体のうち、学生の往来をコーディネートしている団体を補表1に示す。「オーライ!ニッポン大賞」は、都市と農山漁村を往来する新たなライフスタイルの普及や定着化を図るため、日本各地で都市と農山漁村の交流を盛んにする活動に積極的に取り組んでいる団体、個人を表彰するものである。

補表1 「オーライ!ニッポン大賞」受賞団体のうち学生の往来をコーディネートする団体  
Additional table1 The organizations that coordinate the traffic of students, among "Ohrai! Nippon Grand Prize" winning organizations

受賞団体 Award-winning organization	活動地域 Activity area	活動開始年 Start year	団体の所在地 Location of the organization	受賞団体の役割 Role of the award-winning organization
かしも木匠塾	岐阜県中津川市加子母	1995	地域内	学生を受け入れ
地域づくりインターンの会(特非)学生人材バンク	全国複数地域	2001	地域外	学生を派遣
石川県立大学「学生援農隊めぐり」	鳥取県内の集落	2002	地域内	学生を派遣
東京農業大学 多摩源流大学	石川県内	2005	地域外	学生を派遣
愛媛大学	山梨県小菅村	2007	地域内・外	学生を派遣・受け入れ
摂南大学ボランティア・スタッフズ	愛媛県南予地域	2007	地域外	学生を派遣
いなかインターンシップ	和歌山県すさみ町	2009	地域外	学生を派遣
高知工科大学	高知県内11市町村	2010	地域内	学生を派遣
震災復興・地域支援サークルReRoots	高知県榑原町	2010	地域外	学生を派遣
	宮城県仙台市若林区	2012	地域内	学生を受け入れ

- 注6) 小菅村は参考文献8)において、都市住民にとっての「新たなふるさと」として、余暇・学び・社会貢献・自己実現等の場を提供していくことを方針として掲げている。その上で、小菅村に関わりを持つ人々を単なる「観光客」ではなく、広義の「村民」と位置づけ、村づくりへの積極的な参加を促していくための機会や場を整える施策を行っている。なお、広義の村民として「1/2 村民」および「1/3 村民」の2つが定義されており、「1/2 村民」とは仕事や研究で村に携わる人々、「1/3 村民」とは観光や学び等のために頻りに村に通う人々のこととされている。
- 注7) 参考文献7)・参考文献8)をもとに作成し、役場職員へのヒアリング(調査I)と大学事務局員へのヒアリング(調査II)により情報を補足した。
- 注8) 小菅村の様々な交流事業は「村の出身者に1日限りでも故郷に戻ってきたい」という役場職員の思いから始まっている。最初の事業は1987年以來毎年開催されている「多摩源流まつり」である。来客数2千人を想定していたが、初回から約1万人が訪れ、村外からの関心の高さが明らかになった。これを受け、村の総合計画でも、第二次・第三次産業誘致型から転換し、「自然を活かした人と人の交流事業(多摩川の上下流交流)によるむらづくり」の指針を定めた。
- 注9) 第3次総合計画に定められた「源流域の自然を活かした村づくり」の推進のため設立された。
- 注10) 体制面・費用面等で課題があり、すぐに構想を実行に移すことは難しい状況であったが、文部科学省の補助事業に採択されたことを契機に「多摩川源流大学」が開始された。多摩川源流研究所が担ってきたプログラムを引き継ぐかたちで、小菅村における地域資源を活用した体験実習を実施することとなった。
- 注11) 様々な大学と協働しつつ、村の資源に着目し、源流域と下流域の人的・資金的な連携を強固にするための事業に取り組んでいる。設立当初は拠点を小菅村役場に置いていたが、2011年度より多摩川源流大学に拠点を移

した。

- 注12) 源流大学の運営を担う大学事務局員の雇用形態の変遷を補表2に示す。事業開始当初は補助金のみで人件費を賄っていたが、事業継続のため、大学・自治体双方が資金を出資していたことがわかった。

補表2 地域内事務局員・地域外事務局員の雇用形態の変遷  
Additional table2 Changes in employment styles of external and resident secretariats

	地域外事務局員 External secretariat		地域内事務局員 Resident secretariat	
	職員 A Employee A	職員 B Employee B	職員 C Employee C	職員 D Employee D
2006	■事務委託 Commissioned office work	-	■アルバイト Part-time job	-
2007	■事務委託 Commissioned office work	-	■事務委託 Commissioned office work	-
2008	■事務委託 Commissioned office work	●アルバイト Part-time job	■事務委託 Commissioned office work	-
2009	■事務委託 Commissioned office work	●アルバイト Part-time job	■事務委託 Commissioned office work	◆小菅村臨時職員 Village temporary staff
2010	■事務委託 Commissioned office work	●アルバイト Part-time job	■事務委託 Commissioned office work	◆小菅村臨時職員 Village temporary staff
2011	●助手 Assistant	●アルバイト Part-time job	■事務委託 Commissioned office work	◆小菅村臨時職員 Village temporary staff
2012	●学術研究員 Academic researcher	●アルバイト Part-time job	●小菅村臨時職員 Village temporary staff	◆小菅村臨時職員 Village temporary staff
2013~2017	●学術研究員 Academic researcher	■学術研究員 Academic researcher	●小菅村臨時職員 Village temporary staff	◆小菅村臨時職員 Village temporary staff

凡例 legend ■: 補助金 Subsidy ●: 東京農業大学 Tokyo Univ. of Agriculture ◆: 小菅村 Kosuge Village

- 注13) 1期生らが行ってきた水田の活動を続けていくうえで、後継世代への引き継ぎが必要となったことから設立された。

参考文献

- Yamazaki, Y. and Sakuma, Y.: Sumitsugareru Syuraku wo Tsukuru - Koryu, Iju, Kayoi de Ikinuku chiiki, Gakugei-shuppansha, 2017.8  
山崎義人, 佐久間康富 編著: 住み継がれる集落をつくる - 交流・移住・通いで生き抜く地域, 学芸出版社, 2017.8
- Nagasumi, M. and Fukuda, K.: The Present Situation and Problems of the Rural District Recurrence - A Case Study of Nchinan-cho Omiya District, Regional sciences on education, vol.9, no.1, pp.46-51, 2017.3  
長住雅之, 福田恵子: 田園回帰の現状と課題~日南町大宮地区を事例として~, 地域教育学研究, vol.9, no.1, pp.46-51, 2017.3
- Fujiki, S., Hoshino, S., Nakamura, S., Hashimoto, S. and Kuki, Y.: Formation process of continuing support system for Intermediate and Mountainous Area by the city dweller - Focusing on the volunteer activity "Furusato Volunteer" in Kyoto Prefecture, Journal of Rural Planning Association, vol.31, pp.285-290, 2012  
藤木庄五郎, 星野敏, 中村省吾, 橋本禪, 九鬼康彰: 都市住民による中山間地域への継続的支援組織の形成プロセス-京都府「ふるさとボランティア」を事例として-, 農村計画学会誌, vol.31, pp.285-290, 2012
- Sakamoto, T., Hiroshige, Y., Nakajima, M. and Senga, Y.: A Study on The Cooperation Framework for Local Resources Management by Outsiders and Residents in Rural Areas -A Case Study of "NPO Kamiechigo Yamazato Fan Club" in Joetsu City, Nigata Prefecture, Journal of Rural Planning Association, vol.27, pp.299-304, 2009  
坂本達俊, 弘重穰, 中島正裕, 千賀裕太郎: 地域資源を活用した農山村地域づくりにおける外来者と地域住民の協同に関する研究 - 新潟県上越市NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部を事例として-, 農村計画学会誌, vol.27, pp.299-304, 2009
- Kawami, R., Goto, H. and Sakuma, Y.: A study about the revisit after "Community Development Internship program" of Urban-rural interchange, Journal of the City Planning Institute of Japan, no.45-1, pp.1-7, 2010.4  
川見亮介, 後藤春彦, 佐久間康富: 都市農村交流における「地域づくりインターン事業」派遣期間終了後の再訪に関する研究, 都市計画論文集, no.45-1, pp.1-7, 2010.4
- Atobe, T., Goto, H., Yusa, T. and Yamazaki, Y.: The Continuous management of multiple rural urban interchange by college students -A case study in Hayakawa town, Yamanashi prefecture, Journal of the City Planning Institute of Japan, no.44-3, 2009.10  
跡部嵩幸, 後藤春彦, 遊佐敏彦, 山崎義人: 学生を対象とした都市・農村交流の継続に関する研究 - 山梨県早川町を事例として -, 都市計画論文集, no.44-3, 2009.10
- Tamagawa Genryu Daigaku Seika Honpen linkai: Tamagawa Genryu Daigaku Kawa no Minamono kara Yutakasa no Genryu wo Shirou., 2016.6  
多摩川源流大学成果本編委員会: 多摩川源流大学 川の源から豊かさの源流を知ろう., 2016.6
- Kosuge Village: Kosuge Village Regional Revitalization Comprehensive Strategy, <http://www.vill.kosuge.yamanashi.jp/administration/general/>小菅村地方創生総合戦略.pdf (accessed 2019.08.28)  
小菅村: 小菅村地方創生総合戦略, <http://www.vill.kosuge.yamanashi.jp/administration/general/>小菅村地方創生総合戦略.pdf (2019.08.28閲覧)

# INDEPENDENCE AND COOPERATION CONTINUITY WITH INHABITANTS OF FREQUENTLY COMING UNIVERSITY STUDENTS AND GRADUATES IN DEPOPULATED MOUNTAINOUS AREAS

– Focusing on activities derived from “Genryu College” training programs in Kosuge Village, Yamanashi Prefecture –

*Maasa FUJII*<sup>\*1</sup>, *Haruhiko GOTO*<sup>\*2</sup>, *Ryoya MORITA*<sup>\*3</sup>  
*and Yoshito YAMAZAKI*<sup>\*4</sup>

<sup>\*1</sup> AXS Satow Inc., M.Arch.

<sup>\*2</sup> Prof., Fac. of Sci. & Eng., Waseda Univ., Dr.Eng.

<sup>\*3</sup> Assoc. Prof., Ctr. for Comm. Engagement & Lifelong Learning, Tokushima Univ., Ph.D.

<sup>\*4</sup> Prof., Dept. of Regional Development Studies, Toyo Univ., Ph.D.

In Japan, after a period of high economic growth, farm villages have been facing severe labor shortages and population aging with the outflow of population to cities. But the flow of people who move from cities to farm villages has become prominent recently. In particular, since the creation of local revitalization as a policy in 2014, efforts focused on increasing the permanent population have been seen everywhere. However, while the total population of Japan is decreasing, these partly invite population acquisition competition among local governments. In addition, there are cases where migrants as a result of competition won't participate in local roles or events.

Against this background, in recent years there has been a movement to try to enhance the activity amount in a region by increasing the number of external supporters willing to engage with the region even if not settling down there. In particular, exchange programs such as internships for university students during the moratorium period are being held all over the country. University students, graduates and inhabitants are often expected to continue to exchange even after such programs. However, it has been pointed out that it is not easy to maintain the independent attitude for cooperation with local community of university students and graduates (USGs) who participated in those programs. Therefore, it is necessary to examine the possibility of opportunities to make use of the power of USGs in the region, who can be expected to play an active role in the future, and to consider ways to enhance USGs' independence and cooperation continuity with inhabitants.

This study examined each situation change and their relationship in the cooperation between USGs who frequently come to the region independently and inhabitants who are continuously involved with USGs, by surveying in Kosuge Village, Yamanashi Prefecture. The following three points were clarified about the elements to enhance USGs' independence and cooperation continuity with inhabitants.

[1] Effective methods to continue student volunteer group's activities are to build the system for taking over activities with clear roles and to set up an open base (the office in the university where the secretariat of university is stationed) outside the region, where university students who are interested in activities in the region can get together.

[2] An effective method to beget the cooperation developed from the activities of student volunteer group between USGs and inhabitants is to use Community-Reactivating Cooperator Squad (CRCS) members or former CRCS members as mediators.

[3] An effective method to make USGs and inhabitants socialize personally is to place both activity bases close to each other. In particular, this case shows that it is effective for the USGs to stay or work within a 5-minute walk from the residents' houses and workplaces.

From the above, the points that a region can devise are to establish a continuous system, such as incorporating “acceptance of university students and graduates” as part of the work content when recruiting CRCS members, and to set USGs' activity locations in consideration of the proximity to inhabitants.

(2021年6月1日原稿受理, 2022年1月7日採用決定)